



Title	中世王朝物語における包摂と隠蔽の方法論
Author(s)	井, 真弓
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58547
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	井 真 弓
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	中世王朝物語における包摂と隠蔽の方法論
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 加藤 洋介 (副査) 教 授 出原 隆俊 教 授 飯倉 洋一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、院政期から室町時代にかけて成立した中世王朝物語の中から、『夢の通ひ路物語』『石清水物語』『松浦宮物語』の三作品を考察の対象とし、それぞれの作品の主題や作品構造を読み解くことを通じて、中世王朝物語の文学史的意義を定位することを目的とするものである。(400字詰原稿用紙換算約820枚)

第一章は室町時代の成立とされる『夢の通ひ路物語』を扱う。一条権大納言と京極三の君の悲恋物語という点を重視してきた従来の解釈に対し、この悲恋物語は故人となった一条権大納言から託された巻物に記されたものであり、吉野の阿闍梨がこの巻物を読むという入れ子構造になっていることを指摘する。この物語構造を踏まえるならば、三の御子(京極三の君と帝の子、実は一条権大納言の子)に自らの出自を知らせるという一条権大納言の目的に沿って、『夢の通ひ路物語』は読まれるべきであることを主張する。また一条権大納言の物語とは関連性が乏しいとされてきた、「岩田中将とかざしの君の物語」や「六条の君の物語」についても、上記の物語構造を踏まえた上で、一条権大納言や三の御子の物語との関わりにおいて読解されるべきものであると述べる。

第二章は鎌倉時代の成立とされる『石清水物語』を取り上げる。この物語はこれまで、相思相愛の男女が離別し男君が出家を遂げるという「悲恋遁世譚」の一つとして捉えられてきた。しかしながら男君伊予守は武士であって、帝妻候補との私通には罪意識が窺えず、また木幡の姫君の側にも「女の幸いの物語」としての性格が見えないなど、「悲恋遁世譚」の枠組みから逸脱する内容を多く含む。このほかにも典拠である『源氏物語』の人物像との差異を際立たせていること、木幡の姫君の子が伊予守との間に生まれた不義の子である可能性が示唆されていること、伊予守と秋の中納言との男色関係の役割など、『石清水物語』

を読解する上での視座を多く提示する。

第三章は院政期の藤原定家の手によるものとされる『松浦宮物語』について、これを男主人公弁少将ではなく、神奈備皇女・華陽公主・鄧皇后という女君を恋愛の主体として構築している物語であると主張する。その上で、『源氏物語』などの平安時代の物語が男の栄華と女の嘆きを描くのに対し、中世王朝物語は女の栄華と男の嘆きを描くことを特徴とするという見取りのもと、『松浦宮物語』は弁少将の栄華と鄧皇后の嘆きを描くという点で平安時代的でありつつ、自ら積極的に身を退き男の幸福を実現する鄧皇后の姿に、中世王朝物語の男君に通ずる物語構造を読み取っている。これらの主題の読解をふまえた上で、これまで題名と物語内容との関連が乏しいとされてきた「松浦」について、新たに松浦佐用姫伝説に基づく解釈を提起し、さらに否定的評価の多い跋文についても、新たな解釈を提案している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本の中世文学研究において、中世王朝物語に関する研究状況は必ずしも活発であるとは言えない。そのような状況下にあって、本論文は多様な視点による分析を積み重ね、重厚な作品論を展開している。悲恋物語を入れ子構造とする『夢の通ひ路物語』について、その物語構造の枠組みから主題を読み取るべきという主張は正当なものである。三の御子に出生の真実を伝え、その後の人生の処し方を示すことが主題であるとの位置づけのもと、「一条権大納言と京極三の君の物語」「岩田中将とかざしの君の物語」「六条の君の物語」という三つの物語を連関させて読解していることは、作品論として高く評価することができる。『源氏物語』を典拠として指摘するだけでなく、主題に関わっての変容の様相を具体的に示していることにも説得力がある。『石清水物語』についても、従来の「悲恋遁世譚」という枠組みを離れることによって、伊予守や木幡の姫君に関する人物造型の特徴や、秋の中納言との男色関係の果たす役割などに多くの新見を提示している。藤原定家による実験小説であり失敗作との評価が一般的であった『松浦宮物語』について、男主人公ではなく女君たちを恋愛の主体として構築された物語であるとの視座を切り拓くことによって、平安時代から中世への転換期にこの作品を位置づけることを可能にした文学史の見取りも斬新であり、今後の『松浦宮物語』研究にとって有益な指摘であると思われる。

ただ、中世王朝物語は成立や享受の実態が不明であることが多く、そうした面からの考究も今後必要であると思われる。物語に直接書かれていないことを数々想定しその主題や意図を探るという方法論が、作品論として有効であることは認めるものの、本論文が提起した精緻な作品の読解が当時の読者たちにも要求されていたのか、なお不明な部分も多く残されている。「包摂」と「隠蔽」という術語の使用にも、論文中での一貫性が保たれているとは言い難いところがある。

以上のような問題点を含むものの、本論文が『夢の通ひ路物語』『石清水物語』『松浦宮

物語』という中世王朝物語について提示した読解は、今後の研究においても踏まえるべき点を多く含んでおり、高く評価することができると思われる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。